



## 障害をもつ幼児の保育(31)

—この子と出会ったとき—

津守

真

(M)

津守

房江

(F)

### この子と生きるうえで大切にしてきたこと(3)

子どもと「いま」を生きる

F 朝、子どもが目覚め、きげんよく自分から起きてきて、何をしようかと昨日の続きのおもちやを見たりして  
いるときは、大人も今日の一日の明るい予感を感じま

す。でも、毎日の生活の中ではいつもそうはいかなくて、パジャマのままいつまでもうろうろしている子どもを、追い立てて着替えさせたり、子どももぐずったりします。

幼稚園や愛育にやってくる子どもは、そのような現実

の中から出てくるのでしよう。

なかなか門から入ってこないで、私が門まで迎えに  
いってやっと入ってきたK君のことやAちゃんのことな  
ど一人一人の小さかったときの様子を思い出します。で  
もそんな子が自分から入ってきて門のわきの大きな石に  
手をかけて、やつこらしよと持ち上げるときは、力  
がみなぎっているのだろうと嬉しくなります。子どもと  
生きる一日のはじめには、大人もいろいろな思いを持  
ちますが、あなたはどうか。

M 私は子どもたちの中に入るとき、偶然に出会うこと  
になった子どもとの一瞬の交わりを大事にしたいと考  
えています。保育の中では一瞬一瞬が子どもに心を向  
けながら生きることになりますからね。子どもたちはこの園  
の中で今日しようと思っていることがあるのです。それ  
に応えようとし、子どもが解決しようとして願っていること  
には一緒に考えます。言葉で話すことがうまくない子  
は、その表現が非常識に見えることがあります。でも心  
は真剣なのです。

こんな一瞬を積み重ねて、一日となり、一週、一月、  
一年が作られるのです。子どもも大人もそのことは同じ  
です。

### K君の心の繊細さに応えながらの一日

F はじめに話したK君のことですが、愛育の家庭指導  
グループ（小さい子のグループ）に在園し、小学部を卒  
園して、地元の養護学校の中学に進みました。とても朗  
らかで楽しいことが大好きですが、またとても繊細な心  
の持ち主です。そのことを強く感じたのは入園したてこ  
ろ、朝の出会いのときに見せた羞恥心です。木の陰に隠  
れてなかなか入ってこなかったり、部屋では壁のほうを  
向いて壁に向かってひとりポール遊びをしていまし  
た。次第に親しくなってきた、外で遊ぶことも多くなり  
ました。それでも降園のときの大変さはいまも忘れられ  
ません。泥んこになって遊ぶのでどうしても着替えをし  
なければならなかったのですが、なぜあんなに大騒ぎを  
したのか、私の理解もそこまででは及ばなかったことを、

大いに反省しています。

M ああ、あのかの大騒ぎは忘れられませんね。着替えるとき服を脱がなければならぬけれど、自分の裸を見られるのがいやで騒ぐことに私たちも気がついて、子どもの繊細さを思うと、無理に全部着替えないでも済むようにお母さんに衣服を考えてもらいましたね。後になつてテレビの相撲番組が大好きになつたのは、自分にとつて極端に嫌いだった裸を平気で見せているお相撲さんに尊敬を感じたのだろうか。(笑い)

やがて、お気に入り保育者を連れてきて、お相撲を取らせていました。みんな笑いながら「ハツケヨイ」とやりました。私も随分やりましたよ。もちろん裸じゃなければいけません。

F しだいに成長してクラスが進むと、もっと若い活力のある人と遊ぶようになって近くの公園に行くようになりました。公園で何をして遊ぶのか一緒に行った若い保育者が保育後の話し合いのとき、感動して話してくれましたね。K君はおんぶをして大声で「おかあさん」と

くりかえし叫ぶのだそうです。この子にとつて、おんぶをされることも肌を接することで、ためらいがあるし、「おかあさん」と呼ぶこともとても恥ずかしいことだったので。そのころ小さかった妹が成長してお母さんにくついたりするのを、K君はあんなことをしてもいいのかと驚いたり、うらやましく思ったりしたのでしよう。

M 公園なら知っている人に見られないから言えたのだろうね。

F K君の気持ちに気づいた驚きを若い保育者が興奮して話してくれたのも、自分の情報や感動をシェア(注)することでもよかったですね(注・現在私はアジアの女性と子どもを暴力から守るシエルターに手伝いにいっています。そこで使われる言葉で、物や経験を分かち合うという意味のいい言葉だと思います)。

M 保育の後に保育に参加した人達が話し合うことは、いまも愛育で大切なこととして続いていますよ。

## 真剣に生きる「いま」を積み重ねて成長する

F ある日、K君が若い保育者と公園に遊びに行つて園に戻つてきたのが、降園時間の過ぎるころでした。それなのにそれから大積み木を積みはじめました。はじめは、もういいでしょうという気持ちで私は見ていましたが、真剣に体で支えて積み上げていくのです。その迫力に目を見張るようなものを感じて、次第にこの子がいま表現しようとしていることを理解したいと思つて見ていました。

自分の背よりも高くなると、最後の一つは保育者に手伝つてもらつて、やつと上に上げられました。それは見事だったので。

M そうそう、みんなから拍手が起こつたね。

F 私はそのことを考えるとき、なんだか熱いものを感じてしまうのです。

一日の中でいろいろなことをやつて遊んだそのことが、一つ一つの積み木のように、それを積み上げて、保



育の一日の終わりに、思いつきり高いものを作つた。一人では出来ないけれど、この保育者にたすけられて作らずにはいられなかったのだと思ひました。

M 「いま」を積み重ねて生きるとき、その子らしい一日があり、またその先に次の日があつて未来へ向かつて成長していくのですね。

子どもは「いま」をどのように表現し、

大人はどのように受け取るのでしょうか

F K君が自分の一日をこのように表現して、「おもしろかったよ」と伝えようとしたことは、私の勝手な解釈のようで、半信半疑でしたが心に残っていました。

それからかなり時がたつて、小学部を卒業するころに

なったとき、私はK君の成長した様子を見たいと思って朝から大きい子のクラスに入りました。

M そのころあなたは、もうK君のクラスではなく久しぶりに会ったのですね。

F そうです。彼は照れに照れて体全体を身よじって笑って、やっと姿を現しました。彼は楽器に凝っていて、保育者に励まされて次々と管楽器を出してくるので、一番大きいのはチューバで、ケースの蓋を開けて金ぴかに輝くのを見せられました。そしてつぎつぎとトランペットやトロンボーンを出してきて最後になつかしいおもちゃのラッパが出てきましたが、これは幼児期に吹いて遊んだ赤い紐のついたものです。

M 楽器は大体地域の広報に『おゆずりください』という広告を出して、事情を話してゆずっていたいたいものです。そういう好意や努力で得たものなんですよ。

F 私は小さいラッパを見たときK君が「僕はこんなに小さかったけど、大きくなったでしょ」と言っているように思えました。過去から現在へ、堂々と生きているよ

うです。でも、テーマは同じなんですよ。何が変わったかと言えば、恥ずかしがりながらも自信をもって自分の思いを表現していることです。

M ああ、それはこの子に関わった大人たちが本当に丁寧に接し、信頼して見ていたからだと思います。弱い崩れやすいこの子の自我を、いつも「それでいいんだよ」って肯定的なまなざしで見えていたからでしょうね。

幼いころのお母さんの忍耐強い日々の生活は本当に感じました。悲壮ではなく楽しんでやっているのですね。だから無理がないのです。

F もうじき一年一回の同窓会です。青年になったK君は福祉作業所で働いていますが、同窓会をとっても楽しみにしているそうです。そんなに楽しみな過去があることを周りの人からも羨ましがられているそうです。

(保育研究者)